平城京の造営で削平された古墳群

杏尻広１・２号墳　奈良市杏町（からもも）

１．みつかった古墳群

平成 22 年度に杏町（からもも）内で実施した市営住宅建替事業に伴う発掘調査（平城京第 641 次調査）で、奈良時代の掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・土坑とともに弥生時代前期の溝・土坑や古墳時代中期末の古墳２基がみつかりました。今回は、新たに確認された古墳（杏尻広１・２号墳）とその周溝から出土した遺物について紹介します。

調査地周辺では、これまでにいくつかの発掘調査が行われており、平城京跡に重複して弥生～古墳時代の杏遺跡が存在することが知られています。また、調査地から南へ約 200 mの場所で平成７年度に実施した平城京第 337・340 次調査において６世紀前半頃の古墳３基（杏近衛（このえ）１～３号墳）が確認され、平城京の造営で壊された古墳群が遺跡内に広がっていたこともわかりました（図１）。

今回紹介する杏尻広１・２号墳はいずれも方墳です（図２）。一辺約 14 mの１号墳には、長さ３m・幅８m前後の方形の突出部が東側に取り付き、幅 2.8 ～ 5.0 m・深さ 0.6 mの周溝がめぐります（写真１）。また、一辺約 11 mの２号墳にも幅 1.8 ～ 2.0 m・深さ 0.4 mの周溝がめぐります。いずれの墳丘も平城京造営時に削平されて残っていませんでした。杏近衛古墳群と同様に方墳で構成され、突出部のある古墳が一回り大きいのが特徴です。時期的にみると、杏尻広古墳群から杏近衛古墳群へ古墳の築造場所が移動したようです。

図１　杏遺跡と調査地の位置（1/10, 000）

写真１　杏尻広１号墳（北東から）

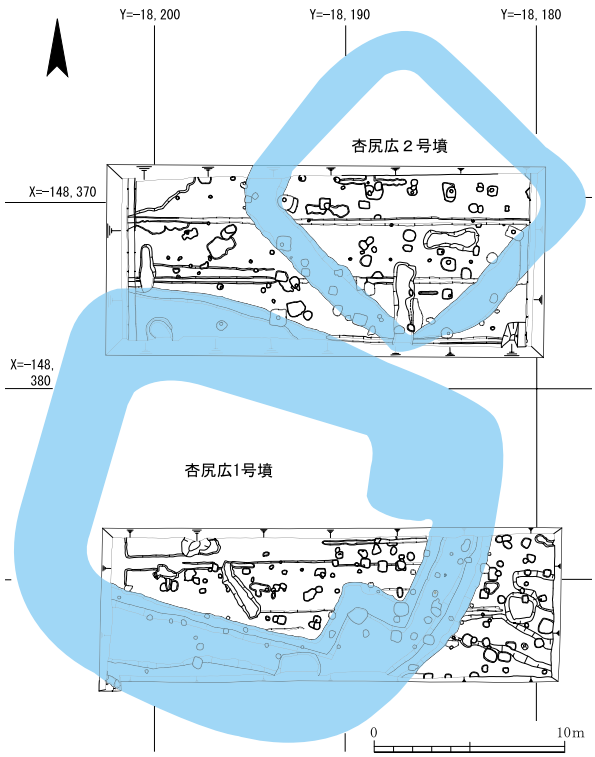

図２　杏尻広１・２号墳平面図（1/400）（網かけ：周溝推定範囲）

２．杏尻広１号墳出土の埴輪

杏尻広１号墳の周溝から出土した埴輪には、主体を占める円筒埴輪・朝顔形埴輪と蓋（きぬがさ）形埴輪・盾（たて）形埴輪・人物埴輪などの形象埴輪があります。また、須恵器杯蓋･杯身･土師器高杯が１号墳、瑟（はそう）・有蓋高杯蓋が２号墳の周溝から出土し、その特徴から５世紀後半の古墳群と推定できます。

円筒埴輪は、３条突帯４段構成であったと推定できます。高さ 39 ㎝程度の底部が少し高い器形になると思われ、全体的な規格性をまだ保持しています。外面はタテハケ調整で、突帯を板で押さえて成形してからなでています。底部調整は認められません。朝顔形埴輪は、口縁部が大きくラッパ状に開く形態をしていますが、つくり方の特徴は円筒埴輪とほぼ同じです。

形象埴輪の中で最も多く出土しているのが蓋形埴輪です。立飾りは無紋で、飾り板と内・外側の鰭（ひれ）の区別がなくなっています。飾り板受部をキノコ形につくるのが特徴的で、皿状になる一般的なつくり方とは大きく異なります。笠部には、粗い放射状の線刻紋様で布張り表現を残しています。

立飾りの基本的な形状は、木津川市上人ケ平 14 号墳例のように一度定形化した後、５世紀後半頃から急激に変容していきます。奈良市菅原東遺跡例は変容しつつも古い形状の名残りを多くとどめていますが、杏尻広１号墳例は逆にほとんどそれをとどめていません（図３）。形状やつくり方が異なるため、蓋形埴輪の製作技術を継承しない工人が形態だけを模倣してつくったものと思われます。

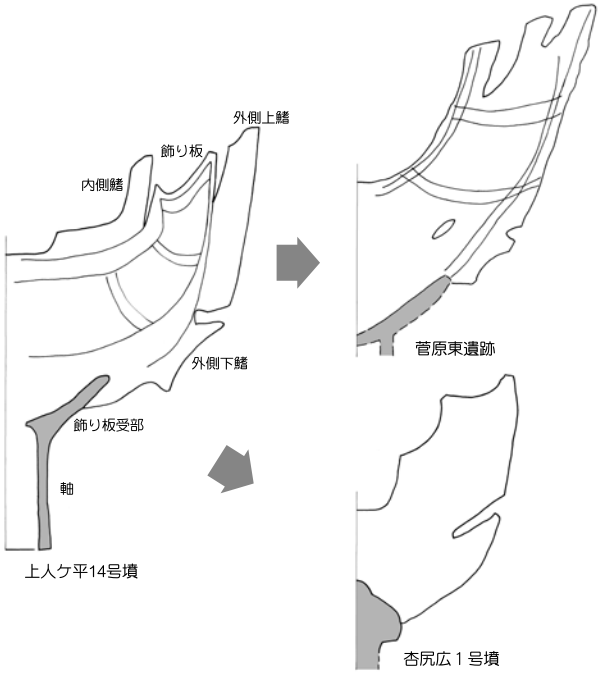

図３　蓋形埴輪立飾りの変化

写真２　杏尻広１・２号墳周溝出土の埴輪と土器

発行　奈良市教育委員会　平成２５年３月